

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 岡本 真

本論文は、戦国期に派遣された遣明船について、派遣主体および搭乗者を中心に検討して、その歴史的な位置づけを明らかにし、さらに十六世紀後半に展開する倭寇的状况や南蛮貿易との関わりを展望しようとするものである。

第一部「経営者・派遣主体からみた戦国期遣明船」では、戦国期遣明船の派遣主体をめぐる通説を批判的に検討し、遣明船派遣状況の実態と特質を指摘する。従来、応仁・文明の乱以後は派遣主体の地位をめぐる大内氏と細川氏が競合し、寧波の乱以後は大内氏が独占するようになったと考えられてきた。この通説に対して、第一章では、両者の競合は明応度派遣船以降に引き下げられるべきこと、さらに大永度派遣船以降は競合内容も変質することを指摘する。第二章では、位置づけが不明確であった天文年間の「堺渡唐船」について、新発見史料の分析もふまえて、これが細川氏によって準備されていた遣明船であったことを明らかにする。第三章では、天文年間に種子島から明に向かった「新貢三大船」の一号船と二号船について、これが第二章で明らかにした「堺渡唐船」にあたることを指摘し、寧波の乱以後においても、大内氏と細川氏の競合状況は継続していたことを導き出す。第四章では、その上でなお大内氏は優位な立場にあったとして、その国内的要因を、幕府との関係や遣明船搭乗者の人材確保という点に求める。

第二部「搭乗者からみた戦国期遣明船」では、さまざまな史料を博搜して遣明船搭乗者の実態を明らかにする。第一章では「山隣派」と称される大徳寺派・妙心寺派の僧侶が遣明船経営に重要な役割を果たしていたことを指摘し、第二章では京都の商人が遣明船に乗り込んでいたことを明らかにし、従来注目されていた五山の僧侶や博多・堺の商人にとどまらない、多様な人びとによって遣明船が担われていたことに注意を喚起する。第三章では、遣明船に乗り込み貿易に従事していた堺の商人日比屋の活動を追跡して、遣明船貿易と十六世紀後半の倭寇的状况・南蛮貿易との連続性を指摘する。

以上のように、本論文は、遣明船派遣主体をめぐる戦国期固有の対立構図を描き出すことに成功しているが、これは研究史の見直しを迫る、優れた実証研究と評価できる。また、遣明船に搭乗した商人たちの動向を丹念に追うことで、遣明船のみにとどまらず、続く倭寇的状况や南蛮貿易との連続性が視野におさめられていることも注目される。後者についてはなお展望にとどまっており、また大内・細川の対立構図を幕府政治史の文脈に位置づけ直すことや、商業活動と貿易活動との関わりを明らかにすることなどに、今後の課題を残しているが、総じて本論文が、当該分野において今後必ず参照されるべき独創的な成果であることは揺るがない。以上により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と判断するものである。